

元禄五（一六九二）年

元禄五年壬申

当年朝鮮人始テ渡来ス于竹嶋

米子灘町大屋等か船ハ、例歳ノ如ク三月廿七日竹嶋ニ着岸シケルニ、先達テ異国人とも来リ。鮑ナク余程取上居ケル体也。其中ニ一人通詞アリ。是ニ来シ由尋問スルニ、難風ニ遭漂着セシ体ニ答フ。此方ノ者申ニハ、元来此嶋ハ我等従公義代々拝領致シ、毎年通船スル嶋ナレバ、疾々出去ヘシト諭

申ケレバ、少し船破損セシ故取繕ツクロヒ早速帰帆スベシト答。此処ノ逗留甚無寛束故、証拠ノ為、唐人

ノ笠・網頭巾等ヲ取テ、直ニ帆ヲ開キ、四月五日米子ニ帰岸セルトカ。渡海最初ヨリ是迄八十年来、

終ニ唐船ノ来ルコト無ト記セリ。

大村家譜

元禄六（一六九三）年

五月四日伯州米子大屋之船頭所ノ捕来之朝鮮人二名来于本府也。後送還于長崎

大屋ガ船頭九郎兵衛ハ、二月下旬米子ヲ発船シ、四月十七日竹嶋へ着船シケルニ、当年モ去年ノ如ク異国人渡来シ、群居シテ海獵セシ故、詮方ナク方便ヲ以テ、異国人兩人ヲ此方ノ船へ乗移ラセ、直ニ帆ヲ返シ、同月廿七日米子へ帰船ス。件ノ異客ヲハ当分大屋力宅へ入置、鳥府江此由注進申上ケレハ、御召寄ニ相成、加藤郷右エ門・尾関忠兵衛等付添、五月四日町会所ニ来リ。詳ニ御穿鑿ノ上、公儀へ御窺ニ相成リ、御裁許ニ依テ以後長崎表へ送還サレタリ。其後七年、八年トモ、通船致シ侍レトモ、弥大人数渡来シ強テ着岸シナバ、危難ニモ可及形成ナレハ、兩年トモ所務相成カタク。直ニ帰船致セシト也。同九年ニ至リ、従公儀竹嶋渡海禁止被仰出ケル故、両家ノ者トモハ、八十年来相続ノ産業ニ放レ大ニ当惑ニ及ヒ、依之同十一年ヨリ十六年迄江戸へ出府シテ、種々嗽訴申上シ

カトモ、終ニ御許容ナク今ニ廢絶セルコト、尤可惜ニアラズヤ（小子按、日記ニ満有コト不審家譜）

唐人式人之内通シ申口

通シ 名ハ アンヘンチウ 年四十三

在所 朝鮮之内トクネンギと申所

下人 名ハ トラヘ

在所 同く ウルサンノ者

三界のシヤクワンより鮑取上ケ申様ニと被仰付、何国と申指図ハ無之由、去年参候者竹嶋へ参候様ニと申聞候由、竹嶋ニて和布・鮑取揚申由

右之式人唐人胸ニ懸申候札之文字左之通（小子按ニ、シヤクワンハ上官ナルベシ）

アンヘンチウ札

表之文字

東 柘齋ト年三十三、長

四尺一寸、面鉄并暫生疤無

萊 主京屋吳忠秋

裏ノ文字

庚釜山佐自川一里

焼印有

午第十四 **虎**三戸

トラへ札

表之文字

庚青 **島**里

第十二 **辰**

焼印有

午五 **亥**

裏之文字

尉 三十里

朴於屯

山 矜四十

**元禄六（一六九三）年**

元禄九年丙子

六月六日 朝鮮国之使船着岸ス于青屋ニ

十日朝鮮国ノ使者十一人來ル由先日注進有之。山崎主馬・平井甚右エ門見届ニ行、青島ニ來ル由ニテ、一昨日喜多村八兵衛御破損方者召連行ノ由也。

十二日朝鮮人加呂マテ來ル由

七月十七日朝鮮人今日青嶋ニ被遣

因幡志筆記之部ニ出

朝鮮人名如左

三品堂上臣

安同知

金鳥僧将釋氏

憲判事

進士軍官

李裨将

帶率

金裨将

金沙工

劉格率

舟ノ凶ニ

水主ナリ

劉漢夫

釋氏帶率僧

ユクワイ

淡法主

ユクワイ

習化主

エンニウリ

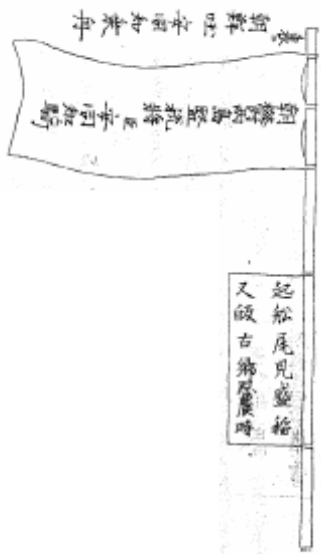
律化主

以上十一人  
タンサキ 責化主

此書ハ青屋ノ茶屋ト云モノ  
今ニ所持スト。外七枚アリ。略之  
次ノ船駛モ右同断

秋 来  
見 月  
多 帰 思  
朝鮮花田李進士書

越前奉書  
文字六、七寸也



因幡志 其大略 云、元禄九年六月五日朝鮮人十一人騎船青屋ノ津へ着ス。是ハ先達大屋カ方ヨリ人ヲ竹嶋へ渡シテ、朝鮮人二人ヲ連歸リ、子細鳥府へ訴ケレバ、高草郡湖山ノ青島ニ放置玉フ。其内一人ノ名ヲ、アンヒンチャントラヘイト云ケルトゾ、其レラ此度御歸シ下サレト云。訴訟ニ来リシトナリ「小子按ニ、此時自朝鮮国当藩へ通船セシスルコト、今ニ於テ子細難知。疑ラクハ竹嶋一許ノ義ナルヘキ歟。即当年竹嶋渡海停止被仰出、然トモ、此一件大村家譜ニ見ヘサルコト不審、若クハ其義ニアラサルカ。亦、二人ノ異国人ヲ青嶋へ留置ル、ト云リモ諸書ニ不見。亦、アンヒンシヤトラヘハ兩人ノ名ナルヲ、誤テ連続シテ一人ノ名トス。青嶋居ラシタルコトモ兩度ノ義ヲ混シ誤レルモノ歟。是迄留メ置ル、ト云コトモ甚不審。諸キニハ初度ノ異客二人ハ町御用場ニ来リ後、長崎へ送り帰サル、トノミ記。  
大村家譜 亦同シ

○因幡古事談ニ云。元禄九年子、朝鮮船一艘青屋灘へ着セルヨシ達ケレバ、太守公早速御儒者辻氏ツシヲ出シ玉フ。筆談アリケリ。同船十一人ソノ頭タル者ノ姓名ヲ李シンシト云。本字不伝。中略。船客等ヲ青嶋へ仮小屋ヲ作りテ居ラシシメ、船十ツ、修補シ、後ニハ府下町御用場ニ来リ。其後長崎へ送り還シ玉フ。即其大略也。小子按、右ニ李シンシ本書不伝ト記ス。因幡志詳ニ挙タリ。尤進士ハ名ニアラズ称也。亦漂客ノ如クニ記非ナルベシ。扱、此節モ海上ヲ送還セラル、モノ歟  
○伝説ニ云。加路東禅寺ヲ異国人ノ旅泊トセシト云モ、此時ナルベキ歟

正月廿八日 政府令府君禁止、於大屋・村川等之渡海于竹嶋  
御奉書写如左

先年松平新太郎因州・伯州領知之節、相同之米子之町人村川市兵衛、大谷甚吉竹嶋へ渡海至于今  
難致漁候。向後竹嶋江渡海之義制禁可申付旨被仰付候間、可被存其趣候。恐惶謹言。

正月廿八日

松平伯耆守殿

土屋相模守  
在判

戸田山城守  
在判

阿部豊後守  
在判

大久保加賀守  
在判